2020.5 岡村昭彦の会 NO.30

第35回AKIHIKOの会中止

外出禁止や自粛要請の陰で、忘れてならないこと

フォトジャーナリスト　**安田菜津紀**氏

岡村昭彦の名刺―フリーランスの勲章

批評家　**米沢 慧**氏

第35回ＡＫＩＨＩＫＯの会は、２０２０年３月28日（土）14時30分から、東京・神田駿河台エスパス・ビブリオで開催すべく準備しておりましたが、３月19日新型コロナウイルス感染症の政府専門家会議の「感染源のわからない患者が都市部に増加した場合爆発的な感染拡大を伴う大流行につながりかねない」という提言を受け、主だった世話人で協議の末、残念ながら今回は中止せざるを得ないと判断いたしました。

つきましては今後、一年後をめどに安田菜津紀さんと米沢慧さんを講師に同じ会場で開催できるように調整してまいります。すでに参加費を振り込んでくださった方で、次回分としてお預かりして構わない方の分はお預かりし、返却希望の方はお返しする旨それぞれご連絡したところです。

この会報は、今回ご講演いただく予定だった安田菜津紀さんと米沢慧さんのコメントを掲載するという形で緊急発行いたします。お忙しいなかご寄稿いただいたお二人に厚く御礼申し上げます。

講演会案内状の送付の際、通信費の送付をお願いしたところ62名の方からカンパも含め25万円ほど通信費をご送金いただきました（4月20日現在）。皆様のご支援を心から感謝申し上げます。ほんとうにありがとうございました。

岡村昭彦の会は、これからも会長なし・会則なし・会費なしで、不定期に通信費（1,000円）をいただきながら、会報（現在30号）を年1回、岡村昭彦研究誌『シャッター以前』（現在7号を12月発行予定で準備中）を不定期に発行していく所存です。

昨今の「ＤＭ便送料・郵便料金の値上げ」「消費税のＵＰ」などにより引き続き資金不足に変わりありません。ＡＫＩＨＩＫＯの会をご支援くださる方で、まだ通信費を振り込んでいない方はぜひご協力をお願いいたします。

さてわが国の新型コロナウイルス感染症は、現在のところ欧米に比べ死者数は少なく抑えられていますが、感染者数は首都圏・関西圏をはじめ全国的に日を追って増加しています。

緊急事態宣言が全国都道府県に出された今、個々の立場や見解の違いはあるでしょうが、一人ひとりがこれまでの行動を見直し、不要不急の外出を自粛し、人との接触機会を減らすなど、行動変容に取り組んでまいりましょう。

外出禁止や自粛要請の陰で、忘れてならないこと

安田菜津紀
（フォトジャーナリスト）

新型コロナウイルスの影響で、残念ながら直接皆さんにお目にかかることができませんでしたが、引き続き、皆さんの健康と安全を祈っています。

そして、祈るだけでは終われません。なぜなら今まさに、刻一刻と、最もあおりを受けている人々が追い詰められているからです。

世界各地で外出の禁止や自粛が要請されています。それは確かにウイルス対策としては効果があることなのでしょう。ただ、DVや虐待といった、家にいることで却って危険な状況に置かれる人々がいることを忘れてはならないと思います。オーストリアでは24時間の支援体制の強化が表明され、シェルターが増設された国もあります。感染拡大への対策と同時に、日本でもこうした視点でのサポートが急務のはずです。

私が取材してきた難民の方々にとっても、事態は深刻です。ウイルス対策の場合は、人々が「移動しないこと」によって守れる命があるのでしょう。けれども紛争や迫害は、そこから「移動しなければ」守れない命があります。２０１９年、日本での難民認定者数はわずか44人だったことが法務省の発表により明らかになりました。今以上に門戸を閉ざすのではなく、検査や検疫などを通した継続的な対応が必要でしょう。

ジャーナリズムとは、こうして世界が大きなうねりにのまれそうになったとき、取り残されてしまいがちな人々の声に軸足を置いた発信であるべきではないかと私は考えています。

同時に、写真をはじめとした文化の今後のためにも、声をあげるときではないでしょうか。イベントの自粛要請が続く中で、２０２０年3月28日、安倍首相は会見で、「税金での損失補填は難しい」と明言しました。今、時のリーダーたちが発するべきは、「自粛は自己責任」「歯を食いしばって自分で乗り切れ」、という切り捨ての言葉ではありません。文化庁に求められているのは、「コロナに負けるな」という根性論を並べることではありません。政治家たちのこうした言葉の裏には、文化の軽視、そして“あいちトリエンナーレ”の「表現の不自由展」への態度にもみられるような、「税金を出すからには口も出させてもらう」という認識があるのではないでしょうか。

ドイツやイギリスなどでは、早々に公的な支援が表明されています。このままでは、写真や音楽、日本の芸術文化は息絶えてしまいます。ぎりぎり今をしのげても、次へのバトンが手渡せなくなってしまうかもしれません。将来、「あなたたちはその時、何をしていたの？」と次世代に問われたとき、「何もできなかった」と答えなければならない事態を作り出したくはありません。今求められているのは、「自己責任＝自業自得」「自分さえよければ」からの脱却、そのための行動だと思います。

写真に、言葉に、そんな思いを込め、これからも取材活動を続けます。次の機会には、ぜひ皆様にお目にかかれますように。

（2020.3.30）

【講師略歴】安田菜津紀（やすだ・なつき）1987年神奈川県生まれ。NPO法人Dialogue for People（ダイアローグフォーピープル/DFP）所属フォトジャーナリスト。同団体の副代表。16歳のとき、「国境なき子どもたち」友情のレポーターとしてカンボジアで貧困にさらされる子どもたちを取材。現在、東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で難民や貧困、災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地を記録し続けている。著書に『写真で伝える仕事―世界の子どもたちと向き合って―』（日本写真企画）、他。上智大学卒。現在、TBSテレビ『サンデーモーニング』にコメンテーターとして出演中。

岡村昭彦の名刺―フリーランスの勲章

米沢　慧
（批評家）

岡村関連資料の箱を思い出したようにいじっていると、ときどき目に触れてはこころが緩む一枚の名刺があります。「岡村昭彦　在アイルランド」と記した一枚。

この名刺を差し出されたら相手は？　ジョークだとおもうでしょうか。しかし、わたしには、「やっと世界史のしっぽをとらえた」と口にしたアキヒコの立ち位置を示した誇りのカードだったのではないかと思います。

★

１９６４年、東京オリンピックの最中に 単独で南ベトナム戦争を従軍した嗅覚からアイルランド系アメリカ人ジョン・F・ケネディの「核時代の実験戦争」を見た岡村はアイルランドへの関心を深めて、１９６８年から６９年にかけてアイリッシュタイムズの契約カメラマンとしてアフリカのビアフラ・ナイジェリア戦争に赴きます。アジア人としての最初のアフリカ取材でしたが、記者としての限界にぶつかります。

何にレンズが向いているかわからなくなった、その思いをむのたけじさんとの対談（『マスコミ市民』１９７２年７月号）で語っています。「僕にとってはニュースであり発見でも、アイルランド人には常識で、何がニュースになり、何がニュースにならないか」わからなかったといいます。世界認識の視野にアフリカが見えていなかったこと。一言でいえば、世界地図を理解していなかったというのです。岡村が私に語った言葉でいえば「君は日本・太平洋が真ん中にある世界地図を知っている。それは大西洋をちょん切った世界なんですよ。だけどね、世界史は奴隷を運んだ大西洋です。世界の端っこ（極東）からは文化圏の違い、といったような取材では済まされないんです。恥ずかしいけど、失敗の記録をさらすしかない」と。

その直後、岡村はアイルランド系のラフカディオ・ヘルンの生涯に関心して『小泉八雲とアイルランド』（『太陽』１９７３年９～12月号）を記録しました。ケルト譚を蘇らせた山陰・松江からニューオリンズ→マルティニーク島そしてダブリンへの旅程でした。

この仕事では私も岡村昭彦の仕事を身近なところでみる機会になったこともあり、印象にのこっています。たとえば、松江からほど近くに建設途上だった島根原発の写真は40年後の岡村昭彦写真展（２０１４年　東京都写真美術館）では最後尾の写影として観ることになりましたが、メルトダウンした福島原発の建屋と重なって見えたほどでした。

関連して、西インド諸島マルティニークからは、板チョコが数枚自宅に届きました。彼が帰国した際に「美味しかった」とお礼をいったのです。すると即座に「奴隷の悲しみは届かなかったのかね」と詰問されたのでした。チョコレートは観光用で包装紙には足枷の鎖が覗いていました。その数日後には逆に貴族が嗜んだというミント系チョコ「アフター　ディナー」一箱と『資本主義と奴隷制』（E・ウイリアムズ　中山毅訳・理論社）が届いたのです。私はこのような流儀で彼から試されることがつづいたのでした。

そして、「在アイルランド」の視座を手にしたのは、〈近代ホスピスの母〉マザー・エイケンヘッドの活動に目を向けたことでした。末期患者のケアを目的として、アイルランドの首都ダブリンに誕生したのは１８７９年12月。名著『ホスピスへの遠い道』の連載直前の一文（「19世紀のダブリンからの報告」）では次のように書いています。

―近代ホスピスのルーツをたどるには、まずロンドンからアイルランドのダブリンに飛び、ハロルド・クロスの丘に建つ１８７９年から１００年以上の年月を超えた〈聖母マリア・ホスピス（アウア・レイディース・ホスピス）〉を尋ねることです。住所は左記の通りで手紙が着きます。

Lady's Hospice
Harold' Cross　DUBLIN
IRELAND

この指示にしたがってホスピス研修にでかけた人は多く、わが国に「死生学」を持ち込んだアルフォンソ・デーケンさんもその一人でした。

【講師略歴】米沢慧（よねざわ・けい）1942 年島根県奥出雲町生まれ。批評家。長寿社会のケアを考えるFT（ファミリー・トライアングル）ケアネット代表。いのちを考えるセミナー・ワークショップを各地で主宰。著書に『「還りのいのち」を支える』『ホスピスという力』『自然死への道』『看護師のための明治文学』など多数。

事務局からのお知らせ

1.「シャッター以前」7号　原稿募集

（没後35周年号、20年12月末刊行予定）

＊特集　自主ゼミの時代（仮題）

岡村ゼミの方法論を繋ぐ―参加者による対談ほか

＊原稿募集テーマ「自由」

岡村昭彦に関するエッセイ・論（2000字～4000字程度）、岡村資料の発掘、岡村文庫・資料室に関する論考・感想など、原稿料はお支払いできませんが、どなたでも応募大歓迎

＊原稿締切　**20年6月30日**

＊なお採用に関しては世話人会にご一任ください。

2. 岡村昭彦関連著書案内

写真集『岡村昭彦の写真　生きること死ぬことのすべて』（岡村昭彦の未発表写真を含む一八〇点を掲載した、初のノートリミング写真集。すべてカラー写真）

東京都写真美術館で２０１４年７月～９月にかけて開催された写真展のカタログを２０００円にてお頒ちします（別途送料３７０円）。ご希望の方は事務局までご一報ください。振込用紙を入れて写真集をお送りします。

3.「没後のアキヒコ・オカムラ」資料編

2019年

6・18　岩波書店刊　徳永進・高草木光一編『「いのち」の現場でとまどう―臨床医学概論講義』

6・27　静岡新聞　故岡村氏（写真家）の功績学ぶ　県立大学で特別講座

7・11　福岡コロニー発行　隈崎行輝著『不思議な旅の日々―日本編・アジア編・ヨーロッパ編』

8・10～17週刊東洋経済　『「いのち」の現場でとまどう―臨床医学概論講義』書評

10・27　北海道新聞　読書ナビ　マチの本屋さん　文庫、新書、ブックレット、岩波書店本の充実

2020年

1・10　『peeps hakodate』vol.74　AKIHIKO OKAMURA 1929-1985

2・28　『本』2月号「血と抗争」連載第1回溝口敦

＊記事の詳細・新聞記事・書評などに、何らかの点で岡村昭彦が論じられています。内容は「岡村昭彦の会」のＨＰから読むことのできるものもあります。

4. 訃報

長年世話人としてご尽力くださった横山巌さん、暮尾淳（本名加清鍾）さんが、それぞれ昨年９月と今年１月に亡くなられました。横山さん58歳、加清さん81歳。お二人とも精一杯生き切っての旅立ちだったと思いますが残念です。ご冥福をお祈りします。

5. 会報や案内など、今後連絡が不要な方はご一報ください。

会報やお知らせは、会員（通信費を振り込んだ方）、岡村昭彦に関わりのあった方、これまでＡＫＩＨＩＫＯの会に参加した方にお送りしています。ここ数年間、全くコンタクトのない方（通信費の送付や会合への出席、「シャッター以前」などの購入履歴のない方）は、今後、名簿から削除したいと思っています。連絡が不要の方はお手数をおかけしますがご一報ください。メールでも結構です。

『岡村昭彦の会　会報』第30号（２０２０・５・１）

発行　東京都江戸川区西小岩五―十一―二十七
戸田徹男方「岡村昭彦の会」事務局
TEL&FAX　０３―３６５７―８３８０
口座番号「００１７０―６―６１５１２３」
加入者名「岡村昭彦の会」
＊メールアドレス akihiko-no-kai@kazekusa.jp
＊ホームページ http://akihiko.kazekusa.jp